

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

ア 本校では、福祉教育を中心に据えながらESDを推進している。1年生から6年生まで発達段階に応じながら計画的に福祉教育を継続し、住みよい社会をつくるために思いやりや助け合いの心を持つ子どもの育成をめざし、主に生活科や総合的な学習の時間において実践している。

また、思いやりや助け合いの心を発揮する対象を人だけではなく、ものやことにも広げることができるように環境教育にも力を入れて実践している。

イ ユネスコスクールとしての活動・全体計画

プロジェクト名「羽山っ子だれかのためにプロジェクト」

(1) 1年生「むかしからのあそびをしよう」(生活科1月)

【ESDで重視する能力態度】⑥つながりを尊重する態度

(2) 2年生「おいしいの気持ちをつたえよう」(生活科2月)

【ESDで重視する能力態度】⑥つながりを尊重する態度

(3) 3年生「よりよいくらしについて考えよう」(総合的な学習の時間10月)

【ESDで重視する能力態度】⑤他者と協力する態度

(4) 4年生「守れ！21世紀の大牟田」(総合的な学習の時間5月～7月)

【ESDで重視する能力態度】②未来を予測して計画を立てる力

【ESDで重視する能力態度】③多面的、総合的に考える力

(5) 5年生「探検しよう『みんなの地球』」(総合的な学習の時間10月～12月)

【ESDで重視する能力態度】②未来を予測して計画を立てる力

(6) 6年生「心のふれあい、伝えあい」(総合的な学習の時間10～11月)

【ESDで重視する能力態度】④コミュニケーションを行う力

(7) 全学年「ESD展示会」(1月)

【ESDで重視する能力態度】③多面的、総合的に考える力

ウ 特徴的な活動事例の紹介

6年生「心のふれあい、伝えあい」(総合的な学習の時間10月～11月)

○ 目標

- ① 高齢者とのふれあいを通して、生き方を学び、また互いのよさを分かり合うことで、高齢化社会へ向けて、共に生きていくことの大切さを気付く。
- ② 高齢者との実際のふれあいの仕方について考え、互いの思いや願いが通じるような交流をする。

○ 実践の展開

① 高齢者体験

大牟田市社会福祉協議会より高齢者疑似体験セットを借用し、高齢者体験を行った。この体験を通して、

- ・ 高齢者の方は、自分達が思っている以上に視野が狭く周りが見えにくいこと。
- ・ 自分達よりも随分と肘や腰を曲げにくいこと。
- ・ 自分達よりも体が重く動きにくいこと。

など、高齢者の方の体について、自分達と比較して考えることができ、違いを実感することができた。この体験をもとに老人保健施設での交流への関心を高めた。

② 1回目の交流

1回目の交流では、全体での出し物(歌やリコーダー奏・手遊び)をして、その後ペアやグループで自由にお話をするようにした。歌や手遊びは、高齢者が知っているような歌を考え、四季を意識して歌を選んでいった。

最初、子ども達の表情は硬かったが、ペアになって手遊びをしたことで、だんだんと表情の硬さがとれて笑顔で接することができるようになってきた。

③ 2回目の交流

子ども達は1回目の交流会の振り返りから、2回目の交流の計画を立てた。2

回目の交流は、グループの出し物を中心に行い、より楽しんでもらえるように計画し準備を行った。

まず、全体でどのような活動をするのかを、それぞれのグループで話し合った。あやとり・すごろく・折り紙・紙風船パレー・お絵かき・工作等の活動が出てきた。それらの内容から、何を取り上げるのかについては、どの内容が高齢者の方に合っていて喜んでもらえるのかを最優先に考えて決めていた。

○ 成果と課題

疑似体験セットを活用して、階段や廊下を歩いてみたり階段を上り下りしたことにより、高齢者の方と自分の体の違いを体感することができ、高齢者の方のために何か自分のできることはないだろうかと交流への動機付けに効果的であった。

1回目の訪問では、仲良くすることを目的としていたが、高齢者の方と想像していたように交流できなかった。そこで2回目の交流に向け、相手を意識した計画を立てた。それで、子ども達は自然と高齢者との距離が縮まり、表情豊かに接することができるようになった。そして、関わることでやさしくなれる自分に気付いたことは、有用感を味わうことにつながった。

課題は、交流は2回で時間的にも短かった。総合的な学習の時間における《課題の設定⇒情報の収集⇒整理・分析⇒まとめ・表現》という一連のサイクルの中で、新たな課題を発見できるようにするために、継続して働きかける場やこの学習の他の対象に関連させたり発展させたりすることが必要である。

エ 本年度の成果と課題

<成果>

これまでの活動の中で、次のような子どもの姿が見られるようになった。教育の質の向上に 効果があったと思われる。

- ・ 子どもたちに高齢者の方や体に障害がある方に対する思いやりの心が育ってきた。また、相手や対象を意識して、どのような計画や行動をとればよいのかをしっかりと考えるようになってきた。
- ・ 自分の思いを他者に伝えようとする意欲や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育ってきた。
- ・ 「大牟田市ユネスコスクールの日」制定記念の一環として開催した「羽山台小学校E S D展示会」により、子ども達は各学年のE S Dの取組を知ることができた。これまで「E S D」という言葉を、教師は子どもに向けて使うことが多くはなかった。しかし、この「E S D」という言葉を全面的に用いたことで、子ども達は「E S D」とは、どういうものなのを捉えることができた。また、教師も「E S D」という言葉を子どもに向けて積極的に用いるようになった。

<課題>

本校における福祉教育を中心としたE S Dの取組は、何より継続が大切であるとの考えから、毎年着実に取り組んでいくようにするとともに、各学年の発達段階に応じながら内容を系統立てて取り組む必要がある。

更に、「E S Dで重視する能力態度」を教師が意識し、総合的な学習の時間だけでなく各教科等においてもE S Dとの関連性を考えて取り組む必要がある。

また、学校だけで完結させるものではなく、家庭や地域、事業者等との連携をさらに密にしながら、共生の意識や意欲、実践力を養っていくようにする。特に、今年度P T A行事として「認知症サポーター養成講座」を行い、多くの子どもが参加した。子ども達が認知症を理解し、自分にできることを行動に移すことができるようにするため、学校の教育活動に位置づけて取り組む必要がある。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）